

アフリカを見る眼

川端正久（龍谷大学教授）

20世紀、アフリカは主体性を奪われてきたが、21世紀、アフリカは主体性を取り戻す。21世紀のアフリカのルネサンスに向けて、われわれは従前の主人的思考を改め、同時にアフリカ自身は自己変革の思想を持つことが重要である。

数年前、イギリス・アフリカ学会のある分科会に出席した際、報告者はアフリカの現状について、ヨーロッパがこれまで多大の支援を提供してきたのにアフリカ諸国の状況はいつこうに改善されないと嘆き、フロアの少数のアフリカ人研究者は不快感を抱きながらも報告に正面きって反論しなかった。紛争、貧困、腐敗などは事実であるが、問題はその認識と解決の仕方である。アフリカ・ベシミズム、その裏には文明（ヨーロッパ）と未開（アフリカ）の思想がある。植民地時代、宗主国（主人）が植民地（臣民）に「植民地支配＝文明化の使命」の訓示を垂れた。そして独立後の現在も援助供与国は提供の条件として民主化と自由化を説教している。一体、何が変わったのだろうか。日本はアフリカの主人になった経験はないが、日本はアフリカの何になろうとしているのか。日本のアフリカ外交の政策において、援助機関やNGOの対応において、アフリカ研究の姿勢において、日本人のアフリカ人観において、主人的発想法がないとは言い切れない。21世紀のアフリカと日本の真のパートナーシップに向けて、アフリカを外側から見る眼が問われている。

十数年前、タンザニア人との会話で、ある人は「ニエレレ自身がムワリム（先生）と呼ばれたいと主張した」といい、またある人は「その先生だけ何を教えたというの」と皮肉った。そこで巷間ささやかれていたゴシップを私が口にしたところ、それは嘘であると全員がニエレレを擁護した。ニエレレ「偉人伝説」をよそ者に汚されたくないのである。ニエレレを中心に記述されたタンザニア現代史すなわち偉人伝説はその粉飾を剥がされつつある。この原稿を書いている今、ザンジバルでの騒乱が伝えられているが、タンガニーカ・ザンジバル連合の誕生の秘密が明らかになれば偉人伝説の一齣がまた崩れる。タンザニアだけでなくいずれの国においても権威主義的指導者を讃美する偉人伝説が翼賛的に生産されてきた。政治や歴史を客観的に分析すれば、一人の指導者ではなく多くの人々が政治や歴史を形成していることは容易に理解できる。将来変革への展望の基礎は自己総括と現状認識である。この点で、独立後の現代政治史を事実に基づいて書き直す営為は不可避である。政治の民主的変革に向けて、アフリカ自身を内側から見る眼が求められている。